

MiCS連携シンポジウム

2026年6月19日（金）15:25-18:00

総合研究棟A110 公開講義室

15:25 開会挨拶

野村 暢彦（微生物サステナビリティ研究センター センター長）

15:30-16:30 講演

飯田 哲也（大阪大学微生物病研究所 所長）

「大阪大学微生物病研究所の歴史と研究の展開」



大阪大学微生物病研究所（微研）は、貿易港・大阪および神戸を通じて外来感染症の流入が懸念された昭和初期に、谷口腴二博士らの先見的な構想のもと、財団法人阪大微生物病研究会（現 BIKEN 財団）と同時に 1934 年に創設された。これにより、微研が基礎研究を、BIKEN 財団が応用研究としてのワクチン開発を担うという、今日の産学連携モデルの原型が確立された。以来、微研は麻疹ワクチンや水痘ワクチンの開発をはじめ多くの成果を挙げてきた。本講演では「感染症の克服」という創立理念を受け継ぎながら、免疫・がん・老化など多領域を横断する生命科学研究を推進してきている微研の歴史と活動について解説するとともに、私自身のこれまでの研究についても紹介したい。

16:30-17:30 講演

黒川 顕（国立遺伝学研究所 教授）

「バイオ生成 AI が切り拓くマイクロバイオーーム研究」



生成 AI 技術の急速な発展は、LLM の登場により社会に大きな変革をもたらしつつある。この潮流は生命科学にも及び、配列・構造・機能を統合的に理解、生成する「バイオ生成 AI」が大きな関心を集めている。我々はこれまで、細菌ゲノム解析やメタゲノム解析を通じて、ゲノム配列には生体機能のみならず、進化や環境適応に関する情報が埋め込まれていることを示してきた。さらに、環境情報そのものが配列空間に反映されていることも明らかにしてきた。近年登場したゲノム言語モデル Evo/Evo2 は、こうしたゲノム配列に潜む規則性を学習する新たな研究基盤として注目を集めている。このような背景のもと、我々は「バイオ生成 AI 研究開発センター（ROIS-ALIS）」を設置し、国産ゲノム言語モデルの研究開発を進めている。本講演では、その背景と研究構想について紹介する。

17:30-18:00 パネルディスカッション

テーマ：今後の微生物研究の展開と MiCS に期待すること

18:00 閉会挨拶

中村 顕（微生物サステナビリティ研究センター
次世代微生物利用部門 部門長）